

© 1998 日本古流華道会  
本誌掲載の写真、イラスト、記事の無断掲載を禁じます。  
R 本誌の無断複写(コピー)は、著作権法上の例外を除き、著作権侵害となります。

## 「日本古流創流百周年への助走」

荒木 一洲 先生 (副家元)

4

## 「日本古流と私の出会い」

細田 一弘 先生  
清水 一幸 先生  
小林 一苗 先生  
天野 一教 先生  
志賀 一然 先生

6

石井 一玲 先生  
杉山 一育 先生  
坂本 一正 先生

11

野口 一竹 先生  
加藤 一政 先生  
坂本 一照 先生

14

創立三十周年記念 **日本いけばな芸術展** 5

8 第十八回 **日本古流いけばな展**

第三十六回 **いけばな協会展** 12

16	ホームページご紹介	東京都野外研究会 ベトナムいけばな使節団	6
15	上席昇格者・卒業者	山梨会いけばな展 むさしの会いけばな展	10
16	第二十七回夏季講座 先代家元十三回忌		



# 日本古流

このたびは一九九七年度の作品を一堂に集めご披露できる機会を得ることができました。きたる日本古流創流百周年にむけて、「日本古流いけばな」を多くの方に感じていただける様に機会を増やしてまいります。今後とも会員の皆様と一緒に研鑽して行ける事を願っております。

一九九八年 一月吉日

三世家元 **角田一忠**

# いけばな

# 日本いけばな芸術展

創立三十周年記念「日本いけばな芸術展」が、10月23日から28日まで、三期に分かれて開催されました。名誉総裁・高松宮妃殿下をはじめ総裁・常陸宮妃殿下をお迎えして、251流派・1000名の作家が一堂に会しました。会場には、30年のあゆみがパネルやビデオで紹介され、500坪のスペースには、見事な大作や連作が並び、伝統の作品にあらたな美意識を加えた技の饗宴が見られました。当花展の入場者は5万人を越え、成功裏に終了しました。

## 日本古流創流百周年への助走

子

供の頃には、ずっと先の日  
と想っていた二十一世紀も  
目前となつてしまいました。

昨年春に「日本古流創流百周年記念事業を考える会」が発足しました。また暮れには実行委員が決まりました。第一回の顔合わせをいたしました。皆様とご一緒に創流百周年記念を祝う機会に遭遇し、立ち会うことが出来るのは素晴らしいことと思っております。この伝統ある「日本古流」を多くの方々に、知って頂く機会になればなによりのことと思えます。会員の皆様には

「日本古流」創流百周年記念を多くの方々に、知って頂く機会  
になればなによりの事と思えます。

も日頃、研鑽を積まれた技とアイデアを発表する舞台を実行委員会でご画し、具体的に成り上がっていくのが楽しみです。会員の皆様からも御知恵を  
実行委員の方に提言していただきたいとお願ひいたします。

ゴールは百周年記念式典ですが、それまでの間にこの実行委員会を中心として大きな花を咲かせたいと願っております。今回の「通信カラー特集号」を事業の一環に成長させ、会員の皆様の活動を一層わかりやすく

お伝えする事を考えております。昨年より公開しているホームページと二人三脚で日本古流の活動を多くの方に知って頂きたいと思ひます。皆様のお力添えを心からお願ひし、記念式典を多くの会員の方と共に喜びたいと思ひます。



荒木一洲 (副家元)  
ホウジグサ、赤トウガラシ



角田一忠 (家元)  
紅葉ドウダンツツジ

細田一弘 「山路」  
ドウダンツツジ、ミチマタ、  
サンキライ、サンゴミズキ



柴崎一仁  
アセビ



三須一壮 「秋風」  
ノイバラ、フジズル

尾崎一住 「雪山讃歌」  
ドウダンツツジ、ミルクブッシュ、  
カスミ草



細田一弘先生

日本古流との出会いは、今にして見ればそれはそれは遠い日の事です。私が嫁いだ家に、故細田一成が「日本古流」の看板を付けていけばな教室を致しておりました。もともと私も生け花が好きでしたので、一成と共に同じ道に精進致して、先代家元の門下となり、昭和二十二年十月一日通常師範の免許を頂きました。

終戦直後のことで、道は荒れて、家元先生のお宅の少し手前まで焼け跡が目立ち、家並みもまばらな風景を見ながら、たくさんの花を抱えてお稽古に通いました。

いつでしたか特に心に残るお稽古は、かきつばたの葉組みで、家元先生の手がまるで「魔法使い」のように私には感じられました。折々の家元先生の一言が優しくまた厳しい教えの中に幾度か涙したこともありましたが、お言葉に「稽古事は休めろ」と思っただけに「よ」といわれたことがあります。この教えを守り、私も懸命に花を活けつづけて参りました。日本古流の席札を置きいろいろな花展に出瓶させていただきました。特に日本百傑展に推薦して頂きました事は、身に余る光栄と存じ、今も先代家元にお喜びいただけました事を誇りに思っております。人間味溢れる家元先生を偲びつつ華道に勤め毎日でございます。これからも三代家元の益々の繁栄を心よりお祈り申し上げます。

清水一幸先生

母のいけばなを見て育ち、庭先の小花をパリン紙に包み胸に抱えて小学校に登校して、その花を教室の柱差しに飾ることが得意で、子供心に花が好きでしたので、昭和十七年に日本古流入門しました。

すでに太平洋戦争もたけなわで、和服を国民服（モンペ）に作り替えて、お稽古は夜にしか出来ませんでした。甲府も終戦の焼け野原と化し、二十一年復興途上の中で稽古を始めました。二十三年には教室を開きました。

この年に山梨県華道連盟が発足され、私も会員として今日まで五十年間休むことなく継続できました。これも人間関係に温められ、自然植物に恵まれて「花」故の幸せでした。お家元先生の記念式典が挙行されますことに、卒業生を百名、二百名、三百名、四百名と記録を達成して賞状を授与されました。来る日本古流百年祭には、五百名の卒業生を迎えたいのが夢です。花一筋に今日あることに感謝あるのみです。

小林一苗先生

私の場合、母がたいへんお稽古事が好きでした。当時は何処の親も望んでいたことですが、女の子は裁縫、料理、お茶、お花等お嫁に行くまでに習得しておくように言われておりました。特にお花は好きでした。たまたまお友達から、日本古流の鶴田一番先生をご紹介頂き、早速甲府市錦町の稽古場にお伺いして入門させていただきました。

甲府は日本古流が盛んで、先生は人格、識見、指導力など大変立派な方でした。ご親切にご指導を頂き、昭和十五年七月十五日に日本古流正教の免許を授けられました。試験は葉蘭の九十九枚生けでした。私の家から稽古場までの片道約四キロを雨の日も、風の日も、和服で下駄を履いて歩いて通い続けて頂いた免状、それは嬉しく幸せでした。

昭和十八年主人が軍隊に召集されましたので、山梨の実家で母の勧めによりまして、自信のないままお花を教えることといたしました。始めは五、六人のお嬢様方でしたが、昭和二十一年主人が帰還致しまして東京に帰る時にはお弟子さんは約百人にも増えておりました。

田舎のこととて沢山の材料の入手選定の困難さ、真つ暗の道を稽古場に自転車で通ったりしたことなどは他の機会に譲りたいと思います。顧みますと日本古流入門して六十年、仕上げました師範も約百五十人になりました。

す。この恵まれたお花の足跡に深甚なる感謝を申し述べたいと思います。

天野一教先生

私が終戦を迎えたのは中国の上海でした。翌年の昭和二十一年一月に復員し教職への復帰を辞退し、当時の食糧営団の業務会計に就職したのが三月三日でした。たまたま事務所の在った北川商店に出張教授をされていた当時の家元顧問の重鎮であった甲府市の村松一文先生の門下生として事務所の女子職員と共に入門したのが昭和二十一年九月初旬であり日本古流との出会いでありました。

私が茶華道を始めたのが昭和十三年十三歳の時でした。多少の心得のある華で村松先生には大変可愛がられました。然し間もなく先生が病床に伏され其の教場を引き継いだのが私の教授生活の始まりでした。先生の没後は私は家元直門として先代家元先生のご指導を戴き現在に至りました。先代はいつも、この子は男子なので必ずや本流の良い教授者になるだろうと期待して一教の花号にしたのだが、と口癖の様に述懐されておりました。

志賀一然先生

私は父が官庁勤めの為、静岡市沼津に転勤し、昭和七年静岡県立沼津高女に入学、半年後、華道部に入った時の先生が堤一喜先生でした。その後皆伝を頂いて、静岡に転勤の



二世家元角田一忠 松梅齋 築華庵

為に引越しをしまして、間もなく堤先生と筑土八幡町のお宅に伺いました。丁度初代家元がご病気の為、二世家元先生のはらら百十五枚のご教授を頂くことが出来まして、御師範の試験が終わりに大変感激しました。その後洋裁学校も卒業しまして、先生の助手を務め、半年位で院長の後を引き継ぎました。私は早速いけばな教室を取り入れ毎週土曜日に教えておりました。その頃のお弟子さんが前支部長の鈴木一澄先生でした。いけばな軌道に乗った頃戦争になり郷里に引き上げて参りました。その後主人が他界の為、後々を考えて、柏を拠点にして、東京方面、茨城方面に稽古に取り組む事が出来ました。中でも柏の丸井の稽古場で長年お世話になり十五、六年続きました。又展示会もやらせていただき、家元にも数回おいで頂き励ましのお言葉を頂きました。二十年住み慣れた、柏を後にして又郷里の茨城県守谷に落着き、日本古流を広げ、又発展を目指していきたいと思っ頑張って参ります。

FLASH BACK (思い出)

東京会野外研究会 (6月22日)

東京会主催による長野県八島高原(湿原)へのバスハイクが行われました。梅雨の晴れ間を、副家元、会長・石井一則玲先生をはじめ、50名が参加しました。標高1620メートルの高原はレンゲツツジの赤色、コバイケイソウの白色など、文字通り色とりどりの花ばなの出迎えを受けました。野外での楽しい昼食の後、2時間程の散策に、心地よい疲れを感じて帰路に就きました。



ベトナムいけばな使節団

昨年2月、ホーチミン市長の招待を受けて、大宮市の後援で大宮市華道連盟の8流派の代表が使節団として、初めてベトナム入りしました。本流からは、三須一壮先生(会頭顧問)が参加されました。エネルギーに復興を遂げたベトナムの方々、3日間を通して生け花のデモンストレーションをされ、「第一回日越いけばな交流」を無事に果たされました。





石井一玲

スモークツリー、芙蓉柳、洗根、スターゲザー、黒染ミツマタ



清水一幸

つげ、グロリオサ、つげ、木彫



志賀一然

ニューサイラン、ヒマワリ、ヤツデ、カスミソウ



保田一伯

越前和紙、アンズリュウム、穂先ナカマド、パイプ



竹島一應

かえで、オンシジウム、アンズリュウム、スターチス、ヘアグラス



本領一広

藤蔓、グロリオサ、ヒマワリ、ドラセナ、デモンドウ、スターチス



天野一教

板谷楓・花菖蒲・大藤蔓



杉山一育

黄赤染ミツマタ、楓、オンシジウム



三富一翠

紅楓、珍至梅、他



角田一忠(家元)  
蘇鉄

# 日本古流いけばな展

第十八回

## '97初夏...つどう花花

第18回日本古流いけばな展が6月6日から6月8日、新宿西口の野村ビル地下1階野村ホールにて開催されました。18回目を迎えた今展は、出品者75名、作品総数60作品が展示されました。今回の構成は、家元、副家元席、格花17席、合作5席、平席5席、サイコロ29席(小品花含む)掛花、釣花各1席でした。作品内容は、美事な個々の大作に加え、グループ作品が幅を広げました。格花は季節の息吹が感じられ、小品作が洗練され、全体的に楽しめる作品群となりました。

私と日本古流との出会いは、昭和二十四年頃でした。食べ物が少しずつ出回り、世の中も豊かになりつつある時代でした。ただ忙しく過ごす毎日でした。静かな一時が欲しい、何か打ち込める事が欲しいと思っっているとき、近くにお花の先生がおられることを知り、早速入門し、お許しをいただきお稽古を始めました。日本古流との出会いでした。

うれしくて感無量でした。お稽古をする内に家元先生宅に試験に行き、厳しいが、また優しいご指導を頂き、うれしい出会いの思い出の出来たことを深く感じました。人と人、物と物、花と流派の出会いもあると思えます。また花と器、人と花といういろいろな出会いもある事に気が付きました。一輪の花が日本古流との大切な出会いでした。最後まで大切に感謝したいと念じています。

日本古流には、数え切れないほどいろいろな思い出と心豊かになる出会いがたくさんあります。百年にむかってまた出会いが増えることでしょうか。これからも出会いや思い出を大切に、感謝の気持ちを忘れずに頑張りたいです。日本古流の未来に祈りを捧げます。

石井一玲先生



一世家元角田一忠 松梅齋 楽華庵

学生時代に、いけば花の科目がありました。週一回でしたが多少の興味を持っておりました。戦時中、鈴木一澄先生が美家に疎開をしていらつしゃられ、叔母の家だった事から何となく伺ってみようかしらと、お友達をお誘いして通い始めました。それが日本古流との出会いでした。

田舎のことで、この木とねらいを付けて木物を集め、その足で畑に回り、菊、ダリア、百日草、グラジオラスと限られた少数の花を持ってお稽古に通いました。生花、盛り花など数多くの花を夢中で生けました。お稽古がわかりますと、美味しいお茶を頂きながら楽しい語らいがございました。

自然の中に育った私は、草花を伸び伸びと自由に活けるお花の魅力に惹かれていきました。そしてそのまま、五十余年今日に至っております。

杉山一育先生

お花を活躍する時だけが、心の安らぎを持てる一時でした。月日の経つのは早いものでそれから五十年になります。活け花を通じて素晴らしい友達も増え、先代の家元にもいろいろと学ばせていただきました。

主人に先立たれましたが、子供たちも各自独立した今日この頃、若い皆さんの素晴らしい弟子たちに囲まれて楽しく暮らせますのは、生け花をつづけてこられたお陰と皆様深く感謝しております。

娘の頃、両親より勧められ、生け花、小唄、三味線、日本舞踊と毎日お稽古にかよっておりましたが、戦争が始まり、次第に激しくなると同時にお稽古どころではなくなりしました。戦後、子供も幼稚園へ行くようになり毎日の送迎の途中、華道教室の看板を見つけた。日本古流との事、娘の頃は草月流でしたが、改めて入門をお願いいたしました。その頃は毎日子育てと家事と姑の世話で明け暮れておりました。

坂本一正先生

## 第十八回 日本古流いけばな展出品者

角田一忠（家元）、荒木一洲（副家元）

細田一弘、小林一苗、三富一翠、石井一玲、坂本一正、柴崎一仁、尾崎一佳、志賀一然、萩原一栄、小川一芳、深澤一霞、榎本一幸、金子一喜、須一壮、清水一幽、伊藤一仙、佐藤一薫、肥沼一華、伊藤一淑、大谷一訓、保田一伯、染谷一汪、関根一弘、山口一敬、片桐一彰、森一麗、山上一幸、野原一訓、本領一広、坂本一祥、神山一萇、小泉一巧、佐藤一瑞、石川一匡、内山一喜、高橋一麗、関口一嘉、下田一調、萩原一牧、三角一協、萩原一優

清水一幸、天野一教、野田一栄、山田一恵、三枝一顕、小林一洋、清水一萇、古屋一城

杉山一育、杉山一訓、長嶋一京、金田一薫、竹島一應



岡野一秀・長沼一徳・谷一栄  
レンギョ、黄カラー、紫陽花



椎名一君・山口一敬・森一麗・野原一訓・萩原一牧・萩原一優  
未央柳、りょうぶ、アンズリュウム、カラー、竹シャガ



金子一喜・小川一芳・萩原一純・肥沼一華・小泉一巧・野田一栄・長嶋一京  
夏ハゼ、シャガ、ギボシ、白、黄カラー



鈴木一壮・羽鳥一翠  
夏ハゼ



三枝一顕  
未央柳、アジサイ、イエロー・ドラゴン、ネット

## FLASH BACK (思い出)

山梨会いけばな展 (5月18日)

山梨会主催のいけばな展が、甲府駅ビル5階のサロンドエクスで開催されました。本展は「小品花」に重点をおいての展示となりました。補佐、正教会員を中心に幹部会員がバックアップをして、84名が出瓶いたしました。小品花の楽しさを充分に見せてくれた支部展となりました。



むさしの会いけばな展 (2月23日)

むさしの会いけばな展が、武蔵野市民ホールで開催されました。開催前日は東京に春一番が吹き、会場内も春の花材に溢れて一足早い春の訪れを告げていました。会長・坂本一正先生の作品をはじめ、幹部会員の平場作品や生花を中心に50作が出瓶されました。若い会員の小品花も加わり、多彩な展示となり好評を博しました。

# いけばな協会展

## 出品者

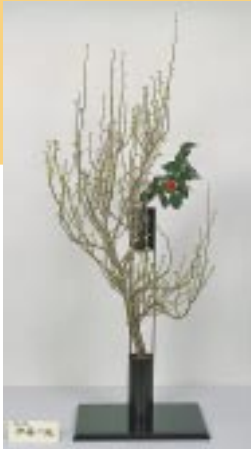
角田一忠、荒木一洲、小林一苗、内山一貴、山上一幸、  
 染谷一汪、岩村一静、関口一嘉、長沼一徳、入角一栄、  
 坂本一正、高橋一麗、富塚一京、森一麗  
 近藤一栄、木下一優、三須一壮、登口一綜、高橋一誠、  
 本領一広、谷一栄、佐藤一瑞、伊藤一仙、柳一修、  
 野中一嘉、大谷一訓  
 柴崎一仁、佐藤一薫、萩原一栄、中島一快、森一洸、  
 伊藤一淑、鈴木一壮、羽鳥一翠、内田一崇、石川一敬



内田一崇  
 モンステラ、チューリップ、カスミソウ



石川一敬  
 カラー、ナルコユリ、ソリダゴ



伊藤一淑  
 ヒュウガミズキ、ツバキ



入角一栄  
 ソナレ



高橋一麗  
 染ヤナギズル、カラー、カスミソウ、スプレーギク



近藤一栄  
 ナルコユリ、カスミソウ、チューリップ

第36回いけばな協会展が3月28日～4月2日、東急百貨店日本橋店7階グランドホールにて開催されました。いけばな協会は超流派の団体として昭和33年に創立され、年々会員数も増大し、今展は参加流派120流、1128名が出品しました。会期中の入場者数は2万5千人余りとなりました。本流からは家元、副家元をはじめ、36名の先生方が出品いたしました。



角田一忠（家元）、荒木一洲（副家元）  
 ボケ



小林一苗、内山一貴  
 黒松、グロリオサ、ヘアグラス



坂本一正  
 ゴムの葉、ソリダゴ、加工材

野口一竹先生

「十年ひと昔」と申しますが、日本古流のお花の先生、故村松一文先生が長坂町より甲府の寿町にお嫁に行かれ、お子様も立派に成人され、村松先生がご自宅の奥に茶華道教室を造られ、お弟子さんを募集して居られるのを耳にして早速入門させて頂いたいただきました。が今から五十年前になります。

松村先生のお宅の庭には数多くの花材になる植木や草花が植えられておりました。花屋さんから届いた花材に更に添えてご指導下さいました。当時は生花の稽古が多く、二年三年とお稽古しても上手に成らずに先生が「左手」「右手」の使い方を手を取ってご指導下さいました。今でも先生の手の温もりが私の手に残っております。四年五年と稽古を続けて行くうちにどうやらお生花の形が出来たときは本当にうれしく思いました。

師範のお許しを頂くときは生花と盛り花の陰陽(菜の花)で、二世家元先生より「これからは益々努力して下さい。」との暖かいお言葉を頂きました。今でも耳元に残っております。材料不足の戦時中でしたので、青空の下の野外研究会で、石、流水、古木、苔、等で二世家元先生、松村先生からのご指導いただいた事は、日本古流の会員として誠に幸せだった事と心の奥に光って居ります。

五十年たった今日でもあの頃が懐かしく思い出されて百周年を迎える喜びのお仲間入り

直門となりました事が昨日のようでございます。

こうして三代の家元の伝統という歴史の重みを感じます時、桜の花の満開の春から噓せするような若葉色香空にとくような青葉の時から、ジリジリとした夏の暑さを明日への健康にと古くから山梨支部恒例の野外研究会を行っております。其の予定をしておりました2ヶ月前山梨県に台風が当たり、山も河も荒れてしまいました。が、決まったことでしたので南アルプスの尾白溪谷大武川にお家元を中心に参りました。家元先生が真白の御影石にむかってコレワコレワ素晴らしいと申され石の花をお造りになり石は生きている働きがあるとご説明下さいました。其の帰り道私の家に皆様とお立ち寄り下さいました。十数年前の追憶でございます。

現家元先生と清里泉郷での研究会奥山路が突然急流となって濁流の中を手を取ってお家元先生と岸から向かいの岸に渡り、ホット一息ついた其の時お家元先生が雨で垂れた枝の美しさを生かす方自然のタイミングのご教授をして下さいました。その時悠久にあるお家元先生のお姿に無限のお姿をみえました。

ハイテクメディアの時代でも、社会情勢や人の意識が大きく変わってゆきつつある現在でも、生け花はそれに対応出来る力をもっています。意識的な美しさにつながる一無限の枝、この百年を迎えつつけて来ました日本古流が、永久の道として時代の進歩とともに



三世家元角田一忠 松梅齋 楽華庵

させて頂けることは、三世家元先生、副家元先生、幹部の諸先生方に深く感謝を申し上げ次第でございます。

加藤一政先生

昭和十八年、大変に複雑な時勢でしたが、一回り年上で赤十字看護婦の義姉が正月には南天、春にはぼたんを床の間に飾り、それらは、庭とは違った趣で家の中を明るくしてくれました。その義姉が町で日本古流の看板を目に留め、入門を勧めてくれました。お年寄りの深沢先生が、稽古中に初代家元のご指導風景や幼少の頃の二世家元のお話をして下さい、流派に親しみを感じておりました。戦後間もなく、初の日本古流華道展に、二世家元が来甲という新聞記事を見て、お会いしたく、早速出掛けました。家元の親戚の岸本様宅でお話を伺い、「東京に来て学んでは」とのお言葉を頂きました。

必要性の重みを感じます。これからも初心忘れるべからず勉強し日本古流発展につとめたいと思っております。

食糧を県外へ持参するときは、村長の証明が必要という不自由な時代。一日中、お花に向かい、一つの材料が型、美しさ、印象を変えていく見事さにうなずき、はじめてみる金盞花の鮮やかさに驚くや、次々に珍しい花材に触れ感動しつつ、専念した毎日でした。親身になり、手を尽くしてのご指導に授かりお陰様にて、花号を戴くことが出来ました。その後、私の実家家元と岸本様が訪れ、大きな古木の南天に「見事だ」とのお褒めに家族共々喜んだ事など懐かしく思い出します。日本古流との、このような出会いに尊く心に思い精進していく所存でございます。日本古流の益々の発展と、三世家元先生のご健勝を祈念いたします。

坂本一照先生

「万物の生々流転に一瞬のとき」  
昭和二十六年四月二十八日甲府の志村花店の志村様と上京致し、お家元先生を紹介して戴きました。お家元にお会いし風格堂々と穏和なお人柄を拝顔致しました。私は緊張してすっかり堅く葉蘭五行活けをご教授賜りました。一葉一枝花が如何に美しく人の心に安らぎを与えてゆく日本古流の神髄をお話しいたしました。「いけ花は偽りなきを道として己が心をうつすものなり」花道は即人の道であること、勉強もケイコも凡て新鮮であるように申されました。志村様が紹介者として家元

上席昇格者・卒業者



家元、副家元、親先生を囲み喜びの記念撮影をする卒業生の皆様(第254回本部春季授与式)

会頭職	高橋一頭	細田一弘	清水一登	坂本一幸	照社中
高橋一頭	竹本一忍	清水一幸	清水一登	坂本一幸	照社中
竹本一忍	関一敬	尾崎一佳	木下一峰	金子一喜	幸社中
関一敬	田中一秀	八巻一正	島田一麗	近藤一喜	幸社中
田中一秀	牧井一友	藤田一徳	加藤一遊	三須一社	社中
牧井一友	宮崎一友	藤田一徳	大門一三	須一社	社中
宮崎一友	補佐職	佐々木一抄	浦野一陽	小川一社	社中
補佐職	二村一伸	尾崎一佳	川鍋一萬	芳社中	社中
二村一伸	西村一尚	志賀一然	玉城一宝	藤原一社	社中
西村一尚	中田一優	坂本一正	黒川一桃	野原一社	社中
中田一優	澤田一正	坂本一正	上野一山	野原一社	社中
澤田一正	兼森一正	坂本一正	三枝一厚	小侯一社	社中
兼森一正	清水一正	坂本一正	三枝一厚	小侯一社	社中

本部春季卒業生	加茂一秀	前原一夏	仁部一嬢
水上一紅	東一敦	鬼塚一教	
原田一宮	福田一完	天谷一恵	
林一恵	福田一完		
大沼一節	高久一汲		
山梨一節	高久一汲		
藤森一香	高久一汲		
折井一好	深月一映		
青木一順	深月一映		
山下一明	深月一映		
森一明	深月一映		
石井一弘	宮下一春		
代永一宮	宮下一春		
長田一律	宮下一春		
大西一世	宮下一春		
本部夏季卒業生	前川一英	石井一径	
伏塚一椀	奥田一彰	岸一蓮	
加藤一崇	奥田一彰	佐藤一兼	
福地一崇	奥田一彰	佐藤一兼	
渡辺一真	奥田一彰	佐藤一兼	
静岡一真	奥田一彰	佐藤一兼	
小野田一優	奥田一彰	佐藤一兼	
山梨秋季卒業生	竹内一秀	富高一草	阿部一夏
近藤一春	若尾一茜	内藤一夏	
山城一春	若尾一茜	内藤一夏	
飯島一倅	若尾一茜	内藤一夏	
丸山一倅	若尾一茜	内藤一夏	
相川一岑	若尾一茜	内藤一夏	
本部秋季卒業生	大内一恵	宮崎一愛	谷本一法
矢野一薫	平佐一宣	吉田一彩	
菅野一薫	平佐一宣	吉田一彩	
伊規一朱	風間一梢	森一有	
林一哲	風間一梢	森一有	
小川一哲	風間一梢	森一有	
松原一徹	佐々木一碧	奥村一弘	
横田一純	佐々木一碧	奥村一弘	
浦野一陽	佐々木一碧	奥村一弘	



第二十七回夏季講座 (8月24日)



残暑の中、200名あまりが出席いたしました。第一部、武蔵野美術大学講師・彫刻家の水元修二先生による「造形空間のとらえかた - その発想の豊かさ」第二部、家元による「祭りの花 - 五節句の花」

水元修二先生の講演は、スライドと対話による熱のこもったもので、予定時間を遥かに越えた内容となりました。家元には、実技とスライドを交えて五節句を多方面からとらえていただき、解説は副家元が担当されました。



先代家元十三回忌 (2月28日)



二世家元十三回忌と偲ぶ会が、2月28日、都下小平霊園・三光寺でしめやかに行われました。家元顧問、有志一同の主催で、導師の読経のなか、家元・副家元をはじめ六三名の本部、支部の幹部会員が焼香いたしました。法要の後、全員で墓前に参拝し、梅の香の中で細田一弘先生の吟詠が捧げられました。後刻、米内屋に席を移し、主催者を代表して小林一苗先生の挨拶があり、偲ぶ会が始まりました。井田一扇先生の献盃をはじめ、天野一教先生や多くの先生方による思い出話がありました。二世家元の声がテープで流れるなか、三富一翠先生による閉会の挨拶があり、和やかな内に散会となりました。

## ホームページご紹介



一昨年11月より公開いたしました「日本古流いけばな」ホームページも昨年末までに5,000ヒットを超え、300点以上の作品を含む国内最大級のいけばなホームページとして各種雑誌に取り上げられました。通信内容の紹介や各種いけばな展の紹介など会員の皆様にお役に立てる内容となっております。

<http://www.bekkoame.or.jp/~nihonkoryu>

あとがき  
ホームページ開設して不可能の事になり、一歩進むかと思えるようになってきました。創立百周年を控えて、今まで何かとお力になつて戴いていただいた家元顧問の先生方にも寄稿していただき、お陰様で内容の充実した通信が出来上がったように思えます。残念な事は紙面の都合で原稿を全部載せきれなかった事です。(二洲) 私自身も昨年、色んな事がありました。転換になりました。編集長様に教わることも多く、大変勉強になりました。力作もたくさんありました。次号では皆様のご意見を少しでも多く取り入れたいと思っております。(一龍) 締切りに追われ、思うように出来ず大変でしたが、皆様に喜んで頂けたら幸いです。次号編集ではレベルアップして、より良い本をお届けしたいと思います。(健)